＜前回：契約思想の射程＞

（１）聖書の根本思想としての「契約」とその射程

１．「神－人間（共同体・民族→個人）」の関係＝契約関係、人格関係における神（人格神）

・契約から創造へ：契約をめぐる思想は、旧約聖書の思想的核心を構成するものであり、創造論も契約思想に基づくものとして解釈することができる（フォン・ラート）。

　旧約聖書の記述の順序で言えば、創造から契約へと物語は展開しているが、思想形成の順序では、契約から創造への展開を指摘することができる（聖書学の成果）。

２．契約の構造：「約束－信頼」　→　責任性・違反への罰則・人格的な関係

　アブラハムと神（主＝ヤハウェ）との契約（アブラハム契約）は、旧約聖書の契約思想の原型と言えるものであるが、それは次のような構造になっている。

約束：子孫の数の増加と土地の取得
⟶
神　　アブラハム（民族の父→古代イスラエル民族）
⟵
信頼

３．古代イスラエル宗教は典型的な民族宗教である。

　神は民族の反映を約束し、民　族はこの神への信頼において統一される。神と人間との契約関係は、人間相互の関係の基本型であって、契約は古代イスラエルの基盤をなす。

４．十戒（出エジプト 20.1-17）→「契約の書」（20-23）

　宗教法（神と人間）から一般法（人間相互）へ

５．旧約聖書における契約の意義＝共同体の形成原理

６．アブラハム契約とシナイ契約という二つの形　cf.ノア契約

　「わたし―あなた」という関係での契約　→　存在論的な議論ではない

（２）社会契約説の系譜

１．アリストテレスの正義論（徳論的正義論）『ニコマコス倫理学』第5巻

　全般的正義／特殊的正義

　配分的正義／矯正的正義／交換的正義

２．自然法、自然権（とくに所有権）　cf. 教会法

３．ホッブス（『リヴァイアサン』）、ロック（『統治論』）、ルソー（『人間不平等起源論』）

・自然状態という仮説：自己中心的欲求という人間本性→各人対各人の全面的な戦争状態

　平和のための権利（自然権）の放棄としての契約（contract）、事態にとっての平等な条件での自由の制限＝主権者への譲渡　→　責務あるいは義務

・自然権、所有権（ロック）、分権論（権力間の相互的制限）

４．功利主義と規範主義（カント主義、義務論的正義論）

（３）ロールズの正義論・社会契約論

・リベラリズム（政治的自由主義、平等主義）

　個人と共同体との関係性

　善（特定の伝統に基づく）の理念に依存しない正義論の構築

　　相対主義や独断論を回避する

　　善に関する種々の競合する構想の多元性を尊重すること。正義の諸原理は、善に関するいかなる道徳的、宗教的ないし哲学的構想からも独立した形で導出されねばならない。

　善（good）に対する正（right）の優位性

５．議論の組み立て

1）社会契約説に基づく形式的・手続き的な正義概念

2)原初状態の仮説・無知のヴェール
3)社会正義の基準（二つの原理）
平等な市民権と所得・富の分配が定める地位
4)正義の諸原理の正当性
６．契約が行われる原初状態（仮説）・無知のヴェール(Veil of ignorance)
・「正義の環境」（その下で人間の協力が可能になり、かつそれが必要とされる正常な状況）において討論されるべき正義の原理の形式的な条件
一般性、普遍性、公示性、順序づけ、最終性
・正義の環境におかれた当事者が知るべき情報の範囲
当事者間の差異は知られておらず、人々は等しく合理的で、類似した状況にあるため、各人は同じ論拠に基づいて正義の構想を確信することになる。原初状態での合意を、任意に選ばれたある一人の人間の観点から眺めることが出来る。彼らには、お互いの境遇をねたみや優越感を抱くことなく、各自の暮らし向きの改善だけを冷静に合理的に推進するという動機付けが付与される。
社会についての一般的な事実と情報は仮定するが、個別的な情報は各人にはわからないものとする。各人の選択が公平であるためには、各人が持つ特定の能力や才能、あるいは社会の中での特定の地位に依存する選択であってはならない。
・合理的選択
正義の原理を社会正義に対するマキシミン解（不確実な選択状況において最悪の事態を最大限改善する方策である「マキシミン・ルール」maximin rule、を採った場合の解答）と解釈する。
選択肢の中から特定のものが選ぶ場合、それぞれの選択肢を選んだときに想定される最悪の結果を比較し、その中で一番ましな選択肢を選ぶ。その結果、正義の二原理が合理的に選ばれる。格差原理があることによって、自分が社会の中で最も不利な立場に置かれたとしても、その結果を受け入れられる。
↓
手続き的正義：社会の中での善悪の配分の問題が、正義の二原理にともなった手続きを遂行することによって、他の要因を考慮せずに決まる。正義の原理を満たす公平な社会体制においては、各人の行為の結果として生じた配分は、その体制と行為が正義の二原理を満たしていれば、公平な手続きに従って生じたものであるから、正義にかなう。
cf.　功利主義：正義に先立つより基本的な目的（最大幸福）があって、それと事実関係に基づいて正義にかなった配分がきまる。
８．正義論の正当化：反照的（反省的）均衡(reflective equilibrium)
熟慮された価値判断（しっかりした道徳判断）
広く共有された道徳的確信や常識道徳を言語的に定式化した「処世の格言」などが含まれる。たとえば、「宗教上の不寛容や人種差別は、正義にもとる」という判断。

（４）契約と社会契約

・Covenant：民族から普遍・正義へ
・Contract：自然（自由・平等）から自由の制限によって市民社会的秩序へ
共同性の成立についての二つの構想
↓
・民族と市民社会（多元的）の差異、しかし、近現代において、民族と国民は同一視される傾向がある。塩川伸明『民族とネイション――ナショナリズムという難問』岩波新書。
・民族が虚構であるすれば（積極的には物語的)、それは社会契約に接近するか？
小坂井敏晶『増補　民族という虚構』ちくま学芸文庫。
・改革派神学における契約神学

３．罪と悪

（1）悪と告白

１．創造・契約・知恵　→　広義の合理性（自然法則／道徳法則）
直観、現象学→本質
２．現実：合理性と非合理性の曖昧な結合・混合（ティリッヒ：Zweideutigkeit, ambiguity）
↓
非合理的なものをいかに言語化・語るのか。詩・祈り、書簡
悪・不幸・罪、神秘・超越・聖なるもの
３．図式化：オットー『聖なるもの』
４．告白あるいは神話：リクール

＜詩編 51 編＞

1 【指揮者によって。賛歌。ダビデの詩。
2 ダビデがバト・シェバと通じたので預言者ナタンがダビデのもとに来たとき。】
3 神よ、わたしを憐れんでください／御慈しみをもって。深い御憐れみをもって／背きの罪をぬぐってください。4 わたしの咎をことごとく洗い／罪から清めてください。5 あなたに背いたことをわたしは知っています。わたしの罪は常にわたしの前に置かれています。6 あなたに、あなたのみにわたしは罪を犯し／御目に悪事と見られることをしました。あなたの言われることは正しく／あなたの裁きに誤りはありません。7 わたしは咎のうちに産み落とされ／母がわたしを身ごもったときも／わたしは罪のうちにあったのです。

＜ローマの信徒への手紙＞

7:14　わたしたちは、律法が霊的なものであると知っています。しかし、わたしは肉の人であり、罪に売り渡されています。15　わたしは、自分のしていることが分かりません。自分が望むことは実行せず、かえって憎んでいることをするからです。16　もし、望まないことを行っているとすれば、律法を善いものとして認めているわけになります。17　そして、そういうことを行っているのは、もはやわたしではなく、わたしの中に住んでいる罪なのです。18　わたしは、自分の内には、つまりわたしの肉には、善が住んでいないことを知っています。善をなそうという意志はありますが、それを実行できないからです。19 わたしは自分の望む善は行わず、望まない悪を行っている。…… 24　わたしはなんと惨めな人間なのでしょう。死に定められたこの体から、だれがわたしを救ってくれるでしょうか。25　わたしたちの主イエス・キリストを通して神に感謝いたします。このように、わたし自身は心では神の律法に仕えていますが、肉では罪の法則に仕えているのです。

（2）悪と神話、解釈学

５．神話→解釈学

＜エデン神話：創世記２～３章＞

「2:16 園のすべての木から取って食べなさい。ただし、善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう」

「3:1 主なる神が造られた野の生き物のうちで、最も賢いのは蛇であった。蛇は女に言った。「園のどの木からも食べてはいけない、などと神は言われたのか。」2 女は蛇に答えた。「わたしたちは園の木の果実を食べてもよいのです。3 でも、園の中央に生えている木の果実だけは、食べてはいけない、触れてもいけない、死んではいけないから、と神様はおっしゃいました。」4 蛇は女に言った。「決して死ぬことはない。5 それを食べると、目が開け、神のように善悪を知るものとなることを神はご存じなの

だ。」6 女が見ると、その木はいかにもおいしそうで、目を引き付け、賢くなるように唆していた。女は実を取って食べ、一緒にいた男にも渡したので、彼も食べた。」

６．エデン神話に基づいて考えるとき、罪はどこからやってきたことになるのか？
・神話という語り方の意義（言語的文学的機能）
　　解釈の多様性を残しつつ、解釈を促す（リクールの悪のシンボリズムの研究）
・ヘビ：善悪二元論
　女：身体・欲望＝悪
　男：自由意志論
　神：神義論
　　↓
キリスト教的悪論の可能性
　自由意志：
　　哲学的意志論のキリスト教的源泉（アーレント『精神の生活　上下』岩波書店）
　　有限的自由（可能性）とその現実化（ティリッヒ）
　　過ちやすさ・脆弱性（リクール）
　　『不安の概念』と『死に至る病』
７．罪と悪
　人間の行為と自然的過程との区別あるいは連関

（３）神義論
８．悪論：どんな悪を念頭に置くのか。
９．ライプニッツ『弁神論』　　cf.　シェリング
・悪の実在の現実、最善なる神が創造した最善の世界。
　悪はその世界の内部でより大きな善のためにのみ許容され存在する
　　悪の現実の消極的理由、予定調和
・自然的な悪（苦痛）、道徳的な悪（罪）、形而上学的な悪（不完全性）
　　欠如としての悪
　　完全化の過程における悪
10．神義論（弁神論）
・何が求められているのか
　理論的な理由づけ・説明が問題なのか、あるいは過去への回帰・復元か
　慰め・癒やしとは？
　関係の回復、見出された意味
・全能性を弱めることは可能か：弱き神
　ホワイトヘッド、ヴェイユ、ヨナス
　シェーラー、ハイデッガー、ヴァッティモ　　cf. ティリッヒ
11．ヨーナス『アウシュヴィッツ以後の神』（モルトマン、北森嘉蔵）
「無関心な死んだ永遠ではなく、時とともに積み重なる実りによって成長していく永遠」
「苦しみ、生成する神」「気づかう神」（18）、「この身にリスクを抱えた神」（19）
「この神は全能の神ではありません」、「全能の力とは自己矛盾、自己否定、無意味な概念」（20）
「〈力〉とは関係概念であって、複数の極からなる関係を必要とします。だとすれば、相手のなかの抵抗と出会わない力は、およそ力がないの同然です。力は力をもつ相手と関わることで発揮されます」（21）
「神の全能は絶対で無限であるという考えについては、このように論理的存在論的な異論があります」、「神の全能と神の善性とを両立させるとすれば、それとひきかえに、神を

まったき測りがたきものに、つまりは謎にせざるをえません」（22）
「完全な善と全能とを神に帰するとすれば、神はまさに完全に隠れた、理解できないものであらざるをえないでしょう」（23）
「神は理解可能で善であり、それにもかかわらず、世界には災いが存在する、と」、「私たちは全能の概念を疑わしいと認めたのですから、消し去らなくてはならないのはこの属性です」（24）
↓
「神の力を限定されたものとみなすべきだ」「神の側からの譲歩」（24）
「神は沈黙しました」、「神はそれを欲したからではなくて、そうできなかったから、介入しなかったのだ、と」（25）
「神が力を断念したのは、ひとえに人間の自由をゆるすためです」（26）
「ルリアのカバラのなかの宇宙論の中心概念であるツィムツム（Zimzum）の考え」「種収縮、退却、自己制限」（27）
「神にはもはや与えるべきものはありません。いまや、人間のほうが神に与えなくてはなりません」（28）
「神的な冒険の運命は私たちの移り気な手のうちに、つまりどう形容するにしても万有のなかのこの地上の片隅にゆだねられており、それに応える責任が私たちの肩にかかっている」、「創造の意図を無にしてしまうこともまた、私たちの手中にあることは疑いえない」（105）、「宇宙規模でなされたの実験」（106）
「エティ・ヒレスムが遺した日記」「一九四三年に彼女はアウシュヴィッツでガスによって殺された」、「「神が私をこれ以上助けないなら、私が神を助けなければならない。・・・・私はできるかぎり助けるようにいつも努めよう」」（107）
12．神義論以前に問われるべきこと。
・人間の不幸は神にいかなる関わりがあるのか。
・不幸についての人間の責任
・神と人間の行為との関連

＜ヨブ記＞
1:1 ウツの地にヨブという人がいた。無垢な正しい人で、神を畏れ、悪を避けて生きていた。2 七人の息子と三人の娘を持ち、3 羊七千匹、らくだ三千頭、牛五百くびき、雌ろば五百頭の財産があり、使用人も非常に多かった。彼は東の国一番の富豪であった。4 息子たちはそれぞれ順番に、自分の家で宴会の用意をし、三人の姉妹も招いて食事をすることにしていた。5 この宴会が一巡りするごとに、ヨブは息子たちを呼び寄せて聖別し、朝早くから彼らの数に相当するいけにえをささげた。「息子たちが罪を犯し、心の中で神を呪ったかもしれない」と思ったからである。ヨブはいつもこのようにした。6 ある日、主の前に神の使いたちが集まり、サタンも来た。7 主はサタンに言われた。「お前はどこから来た。」「地上を巡回しておりました。ほうぼうを歩きまわっていました」とサタンは答えた。8 主はサタンに言われた。「お前はわたしの僕ヨブに気づいたか。地上に彼ほどの者はいまい。無垢な正しい人で、神を畏れ、悪を避けて生きている。」9 サタンは答えた。「ヨブが、利益もないのに神を敬うでしょうか。10 あなたは彼とその一族、全財産を守っておられるではありませんか。彼の手の業をすべて祝福なさいます。お陰で、彼の家畜はその地に溢れるほどです。11 ひとつこの辺で、御手を伸ばして彼の財産に触れてごらんなさい。面と向かってあなたを呪うにちがいありません。」12 主はサタンに言われた。「それでは、彼のものを一切、お前のいいようにしてみるがよい。ただし彼には、手を出すな。」サタンは主のもとから出て行った。
2:8 ヨブは灰の中に座り、素焼きのかけらで体中をかきむしった。9 彼の妻は、／「どこまでも無垢でいるのですか。神を呪って、死ぬ方がましでしょう」と言ったが、10 ヨブ

は答えた。「お前まで愚かなことを言うのか。わたしたちは、神から幸福をいただいたのだから、不幸もいただこうではないか。」このようになっても、彼は唇をもって罪を犯すことをしなかった。
3:1 やがてヨブは口を開き、自分の生まれた日を呪って、2 言った。3 わたしの生まれた日は消えうせよ。男の子をみごもったことを告げた夜も。4 その日は闇となれ。神が上から顧みることなく／光もこれを輝かすな。
31:35 どうか、わたしの言うことを聞いてください。見よ、わたしはここに署名する。全能者よ、答えてください。わたしと争う者が書いた告訴状を 36 わたしはしかと肩に担い／冠のようにして頭に結び付けよう。37 わたしの歩みの一歩一歩を彼に示し／君主のように彼と対決しよう。38 わたしの畑がわたしに対して叫び声をあげ／その畝が泣き 39 わたしが金を払わずに収穫を奪って食べ／持ち主を死に至らしめたことは、決してない。もしあるというなら 40 小麦の代わりに茨が生え／大麦の代わりに雑草が生えてもよい。ヨブは語り尽くした。
32:1 ここで、この三人はヨブに答えるのをやめた。ヨブが自分は正しいと確信していたからである。2 さて、エリフは怒った。この人はブズ出身でラム族のバラクエルの子である。ヨブが神よりも自分の方が正しいと主張するので、彼は怒った。3 また、ヨブの三人の友人が、ヨブに罪のあることを示す適切な反論を見いだせなかったので、彼らに対しても怒った。4 彼らが皆、年長だったので、エリフはヨブに話しかけるのを控えていたが、5 この三人の口から何の反論も出ないのを見たので怒ったのである。
38:1 主は嵐の中からヨブに答えて仰せになった。2 これは何者か。知識もないのに、言葉を重ねて／神の経綸を暗くするとは。3 男らしく、腰に帯をせよ。わたしはお前に尋ねる、わたしに答えてみよ。4 わたしが大地を据えたとき／お前はどこにいたのか。知っていたというなら／理解していることを言ってみよ。
40:1 ヨブに答えて、主は仰せになった。2 全能者と言い争う者よ、引き下がるのか。神を責めたてる者よ、答えるがよい。3 ヨブは主に答えて言った。4 わたしは軽々しくものを申しました。どうしてあなたに反論などできましょう。わたしはこの口に手を置きます。5 ひと言語りましたが、もう主張いたしません。ふた言申しましたが、もう繰り返しません。6 主は嵐の中からヨブに答えて仰せになった。
42:12 主はその後のヨブを以前にも増して祝福された。ヨブは、羊一万四千匹、らくだ六千頭、牛一千くびき、雌ろば一千頭を持つことになった。13 彼はまた七人の息子と三人の娘をもうけ、14 長女をエミマ、次女をケツィア、三女をケレン・プクと名付けた。15 ヨブの娘たちのように美しい娘は国中どこにもいなかった。彼女らもその兄弟と共に父の財産の分け前を受けた。16 ヨブはその後百四十年生き、子、孫、四代の先まで見ることができた。17 ヨブは長寿を保ち、老いて死んだ。

＜参考文献＞

１．高坂史朗編『悪の問題――現代を思索するために』昭和堂。
２．酒井潔／佐々木能章編『ライプニッツを学ぶ人のために』世界思想社。
３．Ａ・プランティンガ『神と自由と悪と――宗教の合理的受容可能性』勁草書房。
４．シェリング『人間的自由の本質』岩波文庫。
５．リクール『悪のシンボリズム』渓声社、『人間、この過ちやすきもの』以文社。
６．ハンス・ヨーナス『アウシュヴィッツ以後の神』法政大学出版局。
７．ウルリッヒ・ベック『〈私〉だけの神――平和と暴力のはざまにある宗教』岩波書店。